

第二章 「聞ク」と「尋ヌ」の語史

一 はじめに	19
二 国語辞典・古語辞典類における記述の検討	19
三 『万葉集』冒頭歌の訓釈をめぐって	21
四 中古和文における「聞ク」と「尋ヌ」	23
四・一 三代集の場合	23
四・二 『源氏物語』の場合	25
四・三 その他中古和文の場合	29
五 おわりに	34

第三章 「聞ク」と「尋ヌ」の展開

一 はじめに	39
二 『今昔物語集』等説話集において	39
二・一 〈質問〉の意味に用いられた「聞ク」	40
二・二 〈質問〉の意味に用いられた「尋ヌ」	41
二・三 他の説話集・随筆などの場合	44

第Ⅱ部 類義語の史的考察

三	平家物語、歌論・能楽論書、謡曲などにおいて	46
三・一	平家物語の場合	46
三・二	歌論集・能楽論集・謡曲などの場合	47
四	抄物・キリシタン口語文献において	49
四・一	抄物の場合	49
四・二	キリシタン口語文献の場合	51
五	おわりに	54
第四章	質問表現における「聞ク」と「問フ」「尋ヌル」	57
——室町時代から近世前期上方語まで——		
一	はじめに	57
二	室町物語・幸若舞曲・説経節において	58
三	近世噺本・仮名草子において	62
四	西鶴・近松作品において	64
五	おわりに	66

第五章	セハシ(忙)の成立とセバシ(狭)……………	71
一	はじめに……………	71
二	セハシの成立とセバシ(狭)との関連……………	71
三	和歌におけるセハシとセバシ……………	75
四	おわりに……………	82
第六章	オソロシ(恐)とコハシ(怖・強)——狂言台本における様相——……………	85
一	はじめに……………	85
二	「オソロシ」と「コハシ」の語誌と狂言台本における概観……………	85
三	「節分」「鬼の継子」を例として……………	88
四	「オソロシ」と「コハシ」の意味・用法とその推移……………	93
五	おわりに……………	96
第七章	コハシ(怖)の成立と展開——中世から近世前期上方語まで——……………	99
一	はじめに……………	99
二	中世、軍記物語以降キリシタン文献までにおいて……………	99
三	戦国軍記、噺本、西鶴・近松作品などにおいて……………	108
四	おわりに……………	112

第八章 「物狂（ぶっきやう）」と「軽忽（きやうこつ）」

—— 狂言台本における使用状況を中心に ——

一	はじめに	117
二	「物狂」と「軽忽」の語誌	120
三	大藏流台本における使用状況	122
四	和泉流及び鷺流台本における使用状況	126
五	おわりに	130

第九章 中世語資料としての『一遍上人語録』『他阿上人法語』

—— モノクサ・サバクル・イロフなど ——

一	はじめに	133
二	「ものくさ」「ものうし」と「まめ」	134
三	「さばくる」「さばくり」	137
四	「いろふ」「いらふ」	140
五	おわりに	144

第十章 清原宣賢系論語抄について

——書陵部蔵「魯論抄」の本文の性格をめぐって——

一	はじめに	147
二	書陵部蔵「魯論抄」の本文の性格	152
三	書陵部蔵「魯論抄」のことばと京大本	157
四	書陵部蔵「魯論抄」第四冊の本文とことば	161
五	書陵部蔵「魯論抄」第五冊の本文とことば	164
六	おわりに	172

第十一章 天理本『狂言六義』と同筆の間狂言本について

第十二章 富樫広蔭自筆本並びに自筆書入本『詞玉橋』について

一	はじめに	183
二	『詞玉橋』（辞玉櫛）各冊の書誌的性格	184
三	一之巻の訂正・書入れについて	188
四	二之巻広蔭書入本について	193
五	おわりに	200

引用・参照文献	205
〔付録〕詞玉橋・辭玉櫛「解説」(『詞玉橋・辭玉櫛』勉誠社文庫64 一九七九年より)	207
所収論文の掲載書籍・雑誌一覧(第五卷)	225
本書所収の論文解説と未来への展望	227
賢草日本語研究会より御礼のことば	234
	238

凡 例

- 1 研究書として刊行されたもの（「初版本」と称する）を根幹に、既発表論文を研究テーマごとに巻を分けて構成している。
- 2 初版本の論文体裁を尊重しており、編者の統一は、【注】表示のあり方など、ごくわずかである。
- 3 編者の統一を控えた理由は、三〇〜四〇年にわたる研究論文執筆において、論題や扱う資料によってその文体や表示面に変容が生じるのは自然の流れであると考えられるからである。また、機械的な統一によって、その論文本来のもつ「調和」をそこないたくなかったからでもある（ただし、数字の表記方法など最低限の統一については、読みやすさを考慮し、編集部のほうで手を加えた箇所がある）。
- 4 ただし、小林賢次は縦書き派であったので、横書き（横組み）で出版された一部の論考については、縦書きに直している。
- 5 引用・参考文献の挙げ方にも、古いものと新しいものとは変容が生じているが、初出、あるいは、初版本のままを反映している（ただし、編集部のほうで可能な限り形式の整理をおこなった）。
- 6 初版本に小林賢次自筆の書き入れがあるものについては、「小林賢次自筆書き入れより」という一項目を設けて、参考にする。
- 7 初版本に誤植等、すでに小林賢次によって朱が入っているものは、6の扱いをせず、訂正された形を本文上に反映させている。

第I部 質問表現における「聞ク」とその類語

第一章 狂言台本における「聞ク」と「問フ」「尋ヌル」

一 はじめに

狂言に「鐘の音」という曲がある。大蔵虎明本（寛永十九年〔一六四二〕書写）から例を示そう。主人が太郎冠名に用を言いつけるところから始まる。

① (主) 罷出たる者ハ、此あたりに住居する者でござある、去程(さるほど)に某のせがれが、事の外成人致て候ほどに、近日に烏帽子をきせふと存るが、のしつけ(熨斗付)をいまだこしらへぬ。かまくら(鎌倉)へかねのねをき、にやつて、いそひでこしらへさせうと存る、常(つね)のことく、下人よび出し (主) 汝よび出す事別の事でハなひ、近日むすこに刀をさゝする程に、汝ハかまくらへいて、かねのねをきひてこひ、のしつけをこしらへてさゝせう程に(太郎冠者)それハ一段めでたひ事で御ざる、事の外御せいじんで御ざる程に、さやうにござらひでハかなハぬ事(虎明本・鐘の音、一748)でござる

主人は刀の鞘を飾る金箔の値段、すなわち「金の値」を聞いてくるように命じたのであるが、太郎冠者は、「鐘の音」を聞いてこいと命じられたものと受け取り、鎌倉五山の各寺の鐘楼を回ってそれぞれの鐘の音を聞き比べて来る。その鐘の音を太郎冠者が擬音で報告するところが、この曲の眼目であるが、それを聞いた主人は叱りつけ、次のようなやりとりがなされる。

② (主) おのれハさた(沙汰)の限りなやつじや、そのつきがね(撞鐘)の事でハなひ、のしつけにせう程に、き

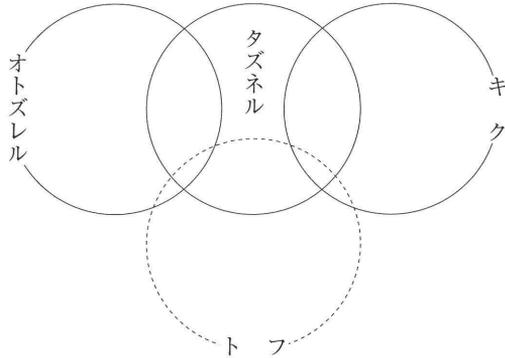
かね(黄金)のねをきひてこひと云たに、さたの限りなやつじや(太郎冠者)私ハ又、かねの音をきひてこひと仰られた程に、それかと思ふてきゐて参つた、それならハそれとう仰られひで(同、一750~751)

「金の値」と「鐘の音」という同音語の聞き違えを趣向とした曲であるが、本章で問題にしたいのは、「金の値を聞く」という「聞ク」の意味である。主人の意図は、金の値段がどれほどかという情報を得てこいということではあるが、「聞ク」の意味としては、〈問う〉〈尋ねる〉に相当するものと考えてよいであろう。現代では、「交番で道を聞く」のように、〈問う〉〈尋ねる〉という意味でも「聞ク」が普通に用いられるが、この狂言の成立・伝承期に、その意味がどれほど一般的だったのか、問題になるところである。⁽¹⁾

そこで、本章では、狂言台本における「聞ク」と、意味上関連する「問フ」「尋ヌル」の使用状況を全体的にとらえ、史的変遷の一過程として位置づけたいと思う。

二 「聞ク」「問フ」「尋ヌル」の意味関係

「聞ク」の基本的な意味として、『日本国語大辞典』では、「①音、声、言葉などを耳に感じとる。耳にする。」の意味と「②音や言葉を耳にして、その内容を知る。そうだろうと思う。また、言伝え、うわさなどを耳にする。」の意味とを区別して立てている。聴覚として耳に達することと、その表現内容を言語として理解することを区別したものである。ただし、「音楽を聴く」などは、この分類では①に入るであろうが、②とも重なるところがある。森田良行(一九七七)では、「耳で感じ取る」作用から意志的な行為へと発展し、「深く理解しようとする行為」へとつながるものとしている。本章では、この二つの意味を区別せずにまとめて扱うこととし、簡略に示す際には〈聴取〉の意味・用法と呼ぶことにする。次に、『日本国語大辞典』における「③人の言葉に従う。承知する。聞き入れる。」の意味のものを〈承知〉の用法として扱う。「頼みを聞いてくれ。」のように、話し手の発言内容を理解し、その依頼・要



〈図1〉「キク・タズネル・オトズレル・トフ」の意味関係

望を受け入れるものである。

本章で特に問題とするのは、次の「④（答えを耳に入れようとして）人に尋ねる。考え、気持などを問う。」のプランチである。この例として『日本国語大辞典』では、『源氏物語』（夕顔）、『方丈記』、浮世草子『好色一代男』以下の例を示している。この意味のものを〈質問〉の用法と呼ぶことにする。この〈質問〉の用法、すなわち、古代語において、「問フ」あるいは「尋ヌ」の意味領域であったところに重なるものとして、「聞ク」の場合もその意味で広く用いられていたのかどうか、問題となる。『角川古語大辞典』においては、「きく（聞・聴・訊）」の項目の③として、「訊（キ）く。尋ねて知る。相手の答えを求め問う。中古までは、この意に用いられた例を確認しがたく、「心とめて問ひきけかしと、あぢきなくおぼす（源氏・帚木）」など、それらしい例も、②「小林注、「耳にとめる。聞いて知る。ことばを聞いて知識を得る。」とみなすべきものが多い。」としている。このように、意味解釈が問題になる諸例の検討、「聞ク」の^②

意味・用法の史的変遷過程については、稿を改めて考察しようと思う。

「問フ」「尋ヌル」においても、それぞれ独自の意味領域を有するが、その一部として〈質問〉の意味において、重なりを持つ。田中章夫氏は、現代語の体系としてであるが、これらの語は〈図1〉のような意味関係を持ち、連鎖構造をなすものと説明している（田中（一九八九））。

ここでは、「問フ」に関しては、〈訪れる・訪問する〉あるいは、〈とむらう・弔問する〉の意味のものをまとめて